ジェフリ・チョーサー作
トゥローイラスとクリセイデ

宮田武志訳

巻の一

その身の上が不幸から幸福へと移ってゆき、のちまた、喜びから離れて行ったという、トゥロイ王プライアムの王子トゥローイラスの二度重ねた恋の悲しみについてお話ししてのち、(1)読者の皆さんとお別れしようというのがわたしの構想なのです。

ああ、(2)ティシフォニの女神よ、わたしを助けて、筆の進みゆくにつれて咽び泣くこの悲しい詩句の数々を書きつづけさせて下さい。苛責の女神、(3)いつも悩みつつ悲しむなる無慈悲なフューリーよ、世の恋人たちが歎き悲しめるよう、及ぶかぎりこれらの人たちに力深えする、悲し一〇い語り手なるわたし、このわたしに加勢して下さい、まことに、悲しみに満ちた人が(4)悲しそうな友を持つということ、また、悲しい物語に顔を曇らせるということは、極めてふさわしいことなのですから。わたしがこのように言うのは、なるほどわたしは恋の神の下僕(しもべ)たちに仕えはしますけれども、柄でもないことゆえ、恋の成功を恋の神に祈ろうという気持にはなれないからです。そのためにこの身が死ぬようなことがあっても祈ろうとは思いません。それほどまでも恋の神の加護から遠く離れて闇にさまようわたしなのです。それはともかくとして、この物語が恋人のどなたかに喜びを与え、二〇その恋沙汰のお役に立つならば、わたしは恋の神に感謝を捧げなければなりませんし、また、わたしも骨折甲斐があるというものです。

ともあれ、恋をなさって居るあなたたち、今こそ喜びに浸っていられるものの、憐みのひと雫のお持合わせがあるならば、あなたたちのお嘗(な)めになった過ぎし日の苦杯を思い返すと同時に、他の人たちの不遇に思いを馳せ、そしてまた、あなたたちが恋の神のつれない仕打ちをどのよ

うにお感じになったかをお考えになって下さい。それとも、あなたたちはいとも易々と恋の神の御意に適ったとおっしゃるのでしょうか。

やがてお読み下さるトゥローイラスの境遇と同じ境遇にある人たちの為に、恋の神がそれらの人たちを天国の喜びに導いて下さるようにとお祈り下さい。そしてまた、恋の神の下僕たちが堪え忍ぶような苦しみや悲しみを、トゥローイラスの不幸な境遇のうちにある程度わたしが示すことができますよう、わたしの為にいと崇き神にお祈り下さい。さらには、恋に絶望して恢復の望みもない人たちだの、男性にあれ女性にあれ、意地の悪い言葉のかずかずによって不誠実にも傷つけられる人たちの為にも祈り、かくて、恋の神の恵みを思い諦めるそれらの人たちが、やがてこの世から立去ってゆくことをご慈悲によってお許し下さるよう、神にお祈り下さい。さらにはまた、安らかな境遇にある人たちの為には、いつまでも愛をつづけてゆくことが出来るよう、神が恵みを垂れ給わんことをお祈り下さい。そしてこれらの人たちに愛人を喜ばせ得る力をお授け下さって、このように愛人を喜ばせることがやがて神を救い神の御心に適うことになるようにとお祈り下さい。

このようにお願いするのは外でもありません。わたし自身、恋の神の下僕たちの為に祈り、その人たちの悲しみを書きしるし、慈悲の心で日を重ね、自分が親しい兄弟であるかのようにその人たちに同情し、このようにしてわたしの心をこの上なく豊かにしたいものだと望むからです。今すぐ物語の本筋に進みたいと思いますから、どうぞ御傾聴下さい。クリセイデを愛するがゆえにトゥローイラスが二度重ねた悲しみ、クリセイデがその生涯のうちにトゥローイラスを捨て去った次第、このようなことをこの物語でお話しすることに致しましょう。

よく知られていることなのですが、武装した強大なギリシャ軍は百千の艦船に乗ってトゥロイに向い、十年ばかりもの長きに亘って倦まず飽かずこの町を包囲攻撃しました。手を変え品を変え、(15)パリスによるヘレンの略奪行為の復讐を果たそうというただ一つの意図の下に、彼等は攻撃に全力を傾けたのでした。さて、たまたま、この町にさる大家が住んでいました。それはカルカスという名のすぐれた陰陽師で、彼は学問に精通していましたので、トゥロイの町が滅ぼされるだろうということを、フィーバスまたはデルフィのアポロと呼ぶ神の託宣によってはっきり予知したのでした。算定によって、また、アポロの神話によって、ギリシャが大軍を送って来てトゥロイの町が滅亡するに相違ないということを知るや、カルカスはすぐさまこの町から逃れる算段を始めました、いや応なしにトゥロイの町が滅ぼされるに違いないということを占星によって確知したからです。そこでこの予知の大家はひそかに逃れ去ろうと決意し、すぐさまギリシャの軍に人知れず投じました。ギリシャ軍は慇懃な態度で敬意を払いながら何くれとなく彼をもてなしました、それは、知識あるこの人のこととて、自分たちが恐るべき危地に陥った場合

には何時でも然るべき忠告を与えてくれるだろうと信頼したからです。カルカスの逃亡がはじめて露見するや、町を挙げて大騒ぎです。裏切者のカルカスが逃げてギリシャ軍に加担したという噂があまねく拡がり、このように不誠実にも裏切りを働いた彼に対する報復の件が議せられ、彼[九〇]の如きはその一族もろとも、皮や骨に至るまで焚き殺されて然るべきだと叫ばれたのでした。

さて、カルカスは自分の娘をこの不幸な出来事の渦中に置き去りにしてしまったのですが、娘は父のこの不信不実の所業については全く知らなかったのでした。娘はどうすれば一番いいのか判断がつかず、命のほどもひどく気遣われて煩悶の極に達しましたが、寡婦の身である上に悶々の情を敢えて打ち明けるべき友達とて無かったのですから無理からぬことです。この女性の名こそクリセイデです。これ[一〇〇]はわたしの判断ですが、このように美しい女性はトゥロイの町中探し求めても見付からなかったことでしょう、といいますのは、生れながらのその美貌は、万人に立勝って天使さながらであり、この世のものを侮るために送られて来た完全無缺な天人のように、不滅不壊なるもののように思われたからです。

父の破廉恥行為、不誠実、裏切行為を罵る声が四六時中耳にはいりますので、この婦人は悲しくもあり恐しくもあり、ほとんど正気も失わんばかりでありましたが、寡婦の着るゆるやかな鳶色の絹の衣服を身に纏って(6)ヘクター[一一〇]の前に跪き、声も痛々しく切なげに泣き濡れながら、身の明かしを立て、憐みを乞うのでした。さて、このヘクターという人は生来憐み深い性格でしたが、今やこの女性が悲しそうに涙にかきくれる様子を眺め、また、その容色が世にも美しいのを見て、持前の優しさからすぐさま慰め励ましつつ言いました。

「厄払いだ、吹っ飛ばしてしまうんですよ、お父上のお裏切りのことなど。あなたご自身はいつまでもお気の向く間、愉快なお気持でトゥロイの町にお住みになればいい、僕たちと一緒に。お父上がこの町にまだお住みになっておれば、その間中、町の人たちはあなたに何[一二〇]くれとなく敬意を払っていることでしょうが、それと全く変らない敬意をお受けになれるようにして差上げますよ。それに、あなたのおからだは、僕が極度に気を配って、保護させることにしましょう。」

クリセイデはいともつつましやかな態度でヘクターにお礼の言葉を述べました。相手の望み次第では幾度でも感謝の言葉を繰返したことでしようが、やがて別れを告げて家に帰り、静かに引籠りました。

家庭におけるクリセイデの暮らし方は丁度身分相応というところで、この町に住んでいる間は体面を守り、老若[一三〇]を問わず人の気受けは頗る上

乗で、世間の評判は極めてよかったのでした。もっとも、この女性に子供があったかどうかは書物で読んだことがありませんので、この点には触れないことにしましょう。

戦の常として、トゥロイ、ギリシャ両軍の間で戦況はしばしば変りました、といいますのは、ある日にはトゥロイ軍の犠牲甚大であり、またある日にはギリシャ軍の側でトゥロイ軍の侮り難いことを知るという工合だったのです。[一四〇]かくて戦のつづく間中、運命の女神は両軍を或は上へ或は下へと、彼女のコースに沿って車輪を駆りつつ引き廻しました。けれども、この町の滅亡するに至った次第を述べるのはわたしの意図するところではありません。それでは余りにも物語の本筋から逸れることになるでしょうし、読者の皆さんを余りにも長くお引きとめすることにもなるでしょう。もっとも、トゥロイ物語の中の出来事のありのままは、読むことのお出来になる方ならどなたでも、ホーマー、(7)ダレス、(8)ディクティスなどで、これらの作者の語るところに従ってお読みになれることでしょう。

ともあれ、ギリシャ軍はトゥロイ軍を取囲み、トゥロイの町をぐるりと包囲しましたが、町の人たちはいとも敬虔に諸神を崇めるという古い[一五〇]慣習を捨てようとはしなかったのでした。中でも(9)パレーディアムと呼ばれる神像を最も崇拝したのは疑いのないところで、この神像こそあらゆる神々にもまして彼等の信仰の的でありました。牧場が楽しい春の新緑に包まれ、紅白とりどりの花が薫る四月の季節がめぐってきますと、書物にも見えるように、[一六〇]トゥロイの町の人たちはパレーディアムの祭典を催すために様々な古風な儀式を執り行いました。そして、パレーディアムの礼拝を聴くために、町中挙(こぞ)って夥しい人々が取っておきの晴着姿で神社に赴きました。無数の元気のいい騎士たち、多数の生々した婦人たち、あでやかな少女たち、上中下、身分は様々ですが何れ劣らぬ盛装を凝らしています。季節もよければお祭もあるのだから、というわけです。

この群衆の中にクリセイデも立ちまじっていました。[一七〇]寡婦の着る黒の衣裳ではありましたが、美しさの点で断然他を抜くことまさに(10)現在われわれの最初の文字がAであるのに等しいと申しましょうか、全く比類とてなかったのです。その美しい姿は群がる人たちの目を楽しませ、黒い衣服で身を包んだその姿に目をとめる人々が口々に言う言葉を借れば、これほど賞讃に値する女性はいまだ嘗て見られたことなく、このクリセイデほど燦然たる星が黒雲のかげに見られたことはなかったのでした。けれどもクリセイデは人々の後の片隅に極めてつつましやかにただ一人静かに佇み、[一八〇]入口に寄り添って絶えず恥ずかしそうに人目を憚っていました。装いも質素で物腰もしおらしく見えましたが、さすがにその容

色、身のこなしには自身のほどが窺われます。

トゥローイラスはよく若い騎士たちを連れて歩きましたが、その日もこの大きな神社のここかしこ隈なく騎士たちを連れ歩きながら、これまで心が乱れるほど一人の女性を熱愛したことのない彼のこととて、あちらこちらで絶えず町の女性たちに目を注ぎ、興味を覚える女性を誰彼なしにほめてみたり貶してみたりしました。[一九〇]このようにして歩きながらも、一行の騎士や従者の誰かがひょっと相当な女性を見つけて、溜息をついたり悦に入って眺めたりはしないかと、おさおさ注意を怠らなかったのです。彼はよくにやりとして、馬鹿な奴だ、と思いながら言うのでした。

「寝もやらず輾転反側ってのを君がやってる最中にさ、豈計らんや、姫御前はいとも安らかにご就寝だよ、君の恋心も知らないでね、人を恋い給う方々のご生活振りだの、おめでたいご精進振りだののことなら、僕は聞いて百も承知さ、恋を得んための苦心惨澹振りだの、失恋すまいとする気の揉み方だののこともね。[二〇〇]折角ふところに入った鳥が逃げると、泣きの涙の愁歎場と来るんだ。馬鹿、間抜け、盲ってのはこのことさ。ところで、[11]人の例を見て反省する連中がいないんだよ。」

こう言って彼は、どうだ、名言だろうとばかりに眉を挙げるのでした。この言葉を聞いて恋の神は、あな憎や、と色をなし、いざ懲らしめてくれんと御心を定められました。そしてすぐさま、その御弓のまだ破れざるをお示しになりました、というのは、忽ちこの男をはっしとばかり射据えられたのです。[二一〇]ともあれ、孔雀のような高慢な者の羽毛をさえ掻きむしり得る御力です。ああ、盲目の人の世よ、盲目の意図よ！　すべて高慢不遜はしばしばそれと反対の結果に終るものです、高慢でも控え目でもとらわれてしまいます。トゥローイラスは階を上りつめて、やがて下りるべき運命をほとんど予期しないのですが、愚者の考えることは常に失敗に終るものです。高慢な栗毛の馬[12]ベーヤドは麦を嗅ぎつけたばかりに道を逸れて跳び出し、長い鞭で打たれて初めて考えるのです、[二二〇]「よく肥えて刈り立ての毛のわしは、一匹の馬に過ぎないんだ。馬の掟を辛抱強く守って、仲間の馬と一緒に車を引かなければならないのだ。」

勇猛高慢なこの騎士もまた、これと同じ運命に見舞われたのでした。やんごとなき王子の身で、自分の意に反して自分の心を掻き乱だすような力を持つものは断じてないのだと信じていましたのに、一目見たばかりに心は燃え立ち、[二三〇]今しがたまで驕りに驕って昂然としていた彼が、今や突然何びとにもまして恋に屈服してしまったのです。このような次第ですから、すべての賢明な誇高き立派な方々よ、かくも忽ちのうちに、

あなたたちの心の自由を奪って自らに屈従せしめる御力を持ち給う恋の神、その恋の神を侮ったためしをこの男にご覧下さい。まことに、恋の神がすべてのものを縛りつける御力を持ち給うことは、過去においても未来においても、常に変ることはないのです、何びともこの自然の掟を破ることはできないのですから。このことが真理であることは過去においても実証せられ、今後も明かにされることでしょう。[二四〇]あなた方のどなたもご存じのことと思いますが、誰よりも完全に恋のとりこになった人たち以上に智慧の勝れた人たちは書物にも書かれていないのです。どんなに強い人でも、すぐれた人でも、身分の高い人でも、恋には敵し難いということもご存じのことでしょう。このことは過去、現在、未来に通じる真理であり、そしてまことに結構なことなのです。と言いますのは、最も賢明な人でも恋には心楽しみ、悲しみのどん底に沈んだ人たちにとっても恋ほどその心を慰め和げてくれたものはなく、無慈悲な心もしばしば恋のために和げられ、[二五〇]立派な人たちも恋ゆえにますますその名声を高めたのであり、また、恋はこれらの人たちをして悪徳や恥辱を最も恐れしめるからです。

さて、恋の神に逆らえる筈はないのですから、また、恋の神こそ本来強大な御力を具え給い、御心のままに人を縛める御力を持ち給うのですから、恋の神に対してその束縛を拒んではなりません。よく撓み曲る鞭は折れる鞭より勝れているのですから、人を導く御力を持ち給う恋の神にすなおにお従いになるよう、皆さんにお勧め致します。[二六〇]ともあれ、さきにお話ししていました王子のことを中心にして話を進めることにして、余事はさておき、彼の喜びやはげしい苦悩など、専ら彼のことに話を限りたいと思います。さきにはお話ししかけたのですから、物語の本筋に関聯した、彼の全行動に筆を返すことに致しましょう。

[二七〇]トゥロイの女性であれ余所の女性であれ、まわりの女性一人残らずあれこれに目を注ぎながら、トゥローイラスは神社の中を打ち興じつつ練り歩きました。たまたま彼の視線は群集の間を縫って奥深く進み、クリセイデの姿に突き当るや、そこに釘付けになってしまったのです。その瞬間彼ははっとしましたが、しげしげ注意して今よく見直しました。おやおや、何処に住んでる人かしら、随分きれいで上品なんだな、そう思うと同時に、胸はふくれ高まって来ましたが、うっかり喋って人に聞かれてはと、ひそかに溜息をつきながら、[二八〇]またもとのふざけた顔につくろうのでした。

クリセイデは身の丈が極めて低いという方でもないのですが、手足はいかにも女らしくて、これほど女性的な容姿はまたとあるものではありません。そしてまた、まさにその物腰たるや、それを見れば充分、この女性の尊敬されていることだの、その身分だの、女性らしい品位だのが

察せられるのでした。あら、わたしがここにいるのがいけないのですの？　そう言わんばかりの様子で目を少し脇に逸らせているのですが、いくらか相手を軽蔑するように見えるその態度、顔付きがまた、実に何とも言えないほどトゥローイラスの気に入りました。そののちクリセイデは晴やかな表情にかえりましたが、そのような美しい風情はまだ一度も見たことがないようにトゥローイラスには思われました。その姿を眺めていると、彼の心の中にはげしい慾情と愛情がむらむらと湧き起って来て、この女性の印象が胸の奥底にしっかりと深く刻みつけられたのでした。

初めのうちはあちらこちらを、しげしげ眺めまわしていましたのに、今や角を引っ込めたいような気持で、目のやり場にも困ってしまうくらいです。どうでしょう、自分を大の利巧者だと思って、恋に憂身をやつす人たちを軽蔑していた彼は、この女性の妙なる眼差の中に恋の神が宿り給うのに全く気付かなかったのです。ですから、今やまさにこの女性の姿を眺めて、突然彼は(13)魂が消え入ってしまうような気持がするのでした。かくまでも人の恋を変える御力を持ち給う恋の神に幸あれ！　黒い衣裳のこの女性が何ものにも勝って好ましく感ぜられ、トゥローイラスはじっと見つめながら立ちつくしていましたが、その恋情だの、このようにして立っている理由だのは、ゆめゆめ顔にも表わさず言葉にも出さないで、さりげない様子をつづけるために、礼拝のつづく間中、遠くから眺めながら、時々あらぬ方に目を向けて見たり、再びこの女性の方に視線を返してみたりしていました。そののち、それほど心を取乱すこともなく落付いた気持で神社を出たものの、今度はわが身にしたたか侮蔑がのしかかって来はしないかと、さきに恋をする人たちをあざ笑ったことが後悔されるのでしたが、心のうちを誰か側の人にさとられてはと、胸の悩みをひた隠しに隠しました。

このようにして神社を出ますと、彼は直ぐさま王邸に向いましたが、相変らず愉快であるかのように装うものの、心はまさしくかの女性の姿で射抜かれ、刺し通されているのでした。そして、顔色と言葉を元気そうに取りつくろい、自らの心を絶えず世の恋人たちから覆い隠さんものと、それらの人たちを嘲笑しながら言うのでした。

「全くのところ、君たち恋人はよくもまあ、それほど愉快そうに暮せるものだね、なぜって、君たちのうちで一等熱心に一等敬虔に恋の神に仕える一番の利巧者だって、御利益ばかりじゃなく禍も同じくらい度々受けるんだからね。君たちがどんな報酬を受けるか、誰にも分りっこないさ。善には善をじゃなくて、殊勝なお勤めが鼻先であしらわれることだってあるさ。全くのところ、君たちの教団には結構な宗規があるんだ

よ。お勤めに精を出してみたってどうなることだか。もっとも、二、三の些々たる点においては話は別だがね。三四〇君たちもよく知ってることなんだが、君たちの宗規くらい大変な献身を要求するものは外にはないんだ。だけど確かに、こんなことはまだまだ生やさしい方だ。だが、もし僕が君たちに一等ひどい点について話せば、君たちは僕に不平を並べるよ、真実を語ったにしてもね。それはともかくとして、こういうことには注意してくれ給え、それは、恋をする君たちがしばしば善意で以て差控えたり敢えてしたりすることをだね、君たちの愛人は得てして誤解したり自分なりに悪意に解釈したりするものだってことなんだ。しかも愛人が何かほかの理由で柳眉を逆立てるようなことがあれば、君たちは忽ち悲鳴を上げるんだ。三五〇はてさて、君たちの仲間の一人たり得る者は幸なるかなだよ。」

このように憎まれ口を叩きはするものの、一人きりの時になると沈黙するほかに手はなかったのです、と言いますのは、恋がとりもちで彼の羽を固めはじめ、従者たちに向って、何かほかの用務に忙殺されているような振りをすることは容易なことではなかったのです。憂鬱のあまり施す術も知らず、何処へでも好きな所へ行ってくれと従者たちに命ずるのでした。居室に一人きりになると、ベッドの脚もとにぺたりと坐り込んで、三六〇まず溜息をつき、次に呻き声を上げるという有様です。そして今は誰にも妨げられずに、例の女性のことを絶え間なく思いつづけ、身は坐して目を覚ましていながらも、夢現の有様で心にえがくのは、自分が神社の中でかの女性に逢い、まさにその様々な姿態を打ち眺めている光景で、かくてかの女性の姿を新たにつくづく思い出すのでした。このようにして彼はおのが心を鏡となし、その中でかの女性の姿を完全に再現するのでした。そして心中ひそかに確信することができました。それは、自分がこれほどの佳人に愛を感じるということはまさに幸運と言うべきだ、一意専心騎士としてあの女性に仕えるならば、三七〇その寵愛をかち得ることができようと言うものだ、少くともその下僕の一人にはなれるだろう、ということです。更にこうも考えました。あのような麗人の為に悩んだり悲しんだりする自分の思いは無駄には終るまい、それに、自分の恋情がよし人に知られたとて恥になるどころか、以前にも増して世の恋人たちが挙って賞讃し尊敬してくれるだろう。このように考えたのでした。やがて来るべき苦悩には深く思い至らないで、恋心の芽生えた当初、彼はこのように自問自答したのです。

かくて彼は恋のわざを続けようと思い定め、さて考えました。それは、最初のうちは恋情を胸の檻の中にかくまって誰にも全然知られないよう、三八〇極秘の行動を取ることにしよう、人に知られることによって取り返しのつかないようなことになるんだとすれば、ということでした。あまり恋風を吹かせ過ぎると、蒔かれた種はよく甘くても結ばれる実は苦いものだということも念頭に置いていたのです。このように考えつづけた

上にも更に、あの女(ひと)にどんな話をしようか、こういうことは口に出さないでおこう、などと考えてみたり、どういう風に口説き落そうかと思案してみたりしました。そして直ぐさま歌い出しましたが、憂愁に打勝たんものと、[三九〇]彼は声高く歌いはじめたのでした、といいますのは、クリセイデを愛しよう、そして、愛したことを決して悔いないことにしようと、希望に燃えながら固く心にきめたからです。[14]ローリアスというこの物語の原作者の書くところに従って、国語の相違は致し方がありませんが、トゥローイラスの歌の全体に亘り、その歌の心のみならず一語一句はっきりとお伝えすることに致しましょう。この歌を聞きたいとお望みの方は、次の歌をお読み下さい。

[15]トゥローイラスの歌

[四〇〇]恋の神などおわさないのなら、ああ、なぜこんなに痛むのだろう、僕の胸は？
恋の神がおわすのなら、どんなお姿、どんな方なのだろう？
恋の神がいい方なのなら、どこから来るのだろう、この悲しみは？
恋の神が悪い方なのなら、どうも不思議だ、
恋の神から来る苦しみや不幸がすべて、
僕には楽しいものに思われるのだ、
だって、恋の酒を斟めば斟むほど、ますます喉が渇くのだもの。

自ら求めて、われとわが心を燃やすのに、
どこから来るのだろう、この歎き、この悲しみは？
心に適った苦しみなのに、なぜ僕は苦情を言うのだろう？
[四一〇]訳が分らない、なぜこう心が滅入るのだろう、疲れてもいないのに。
ああ、生きたままの死よ！　ああ、得も言わぬ甘美な憂愁よ！

なぜお前はこれ程まではびこるのだ、僕の心の中で？
許しもしないのに、そんなことは。

もし僕が許したのなら、僕が歎くのは間違いだ、たしかに。
かくて、ここかしこに僕はゆさぶられるのだ、
海原の真っ只中、
絶えず相逆らう二つの風の間で、
楫緒絶えた小舟に身を委ねて。
ああ、何だろう、この不思議な病気は？
四二〇 冷たい熱さ、熱い冷たさ、そのために僕は死ぬのだ。

それから彼は恋の神に向っていとも哀れな声で言うのでした。

「ああ、恋の神よ、今わたくしの心をあなたに献げます、当然あなたのものなのですから。ああ、神よ、ここまでわたくしをお導き下さったあなたに感謝致します。ところで、あなたがわたくしをして仕えしめ給うあの女性、あの女性は女神なのでしょうか、人間の女なのでしょうか、わたくしには分りません。いずれにしましても、わたくしは何時までもあの女性の下僕として生き、下僕として死にたいと存じます。あなたの御力にふさわしい場所でもあるかのように、あの女性の眼の中にあなたは何と力強く座を占め給うことでしょう。四三〇 ですから、神よ、わたくしの献身が、または、このわたくしが、あなたの御心に適いますならば、わたくしに御恵みをお授け下さい、今わたくしは王子の身分を捨ててあの女性の手にそれを委ね、わが愛する女性として、いとつつましやかにあの女性の下僕になる積りなのですから。」

心の中に燃え立つ恋の焔は、あな恐しや、王家の血を引く身分とて容赦せず、また、美徳、勇武の心ありとも彼を許さばこそ、おのが奴隷として彼を苦悩のうちにひれ伏せしめ、四四〇 絶えず新たに彼の心を様々に燃え立たせ、かくて彼は日に幾度となく色を失うのでした。かの女性に対する恋情のために、日毎に想いは益々はげしく募って来て、為すべき他の一切の仕事を捨てて顧みない有様です。そこで、燃える胸の焔を消すた

トゥローイラスとクリセイデ

めにかの女性の美しい姿を見たいものだと、彼の心はしきりに逸るのでした、それは、かの女性の姿を見ることによって心が安らかになることを期待したからなのですが、その姿に近づけば近づくほど、彼の胸は益々はげしく燃え立って来ます。それもその筈で、焔に近づくにつれて益々熱さを覚えるものだということは、ここにお集りの皆さんのよくご存じのところだと思います。[四五〇] トゥローイラスが焔の近くに身を置いていたか、遠く離れていたかはとにかくとして、ただこのことだけは確かに言えます、それは、夜と言わず昼と言わず、また、そのことの賢愚の程は如何にもあれ、胸の眼とも言うべき彼の心は、その美しさ(16)ヘレン、(17)ポリクシナに立勝るかの女性の上に絶えず置かれていたのだということです。

さてまた、彼は毎日必ず、一時間のうちに何度も独言を繰り返すのでした、「美しい方、僕はあなたにお仕えして骨身を惜しまず全力を尽くしたいのです。クリセイデさん、後生だから、[四六〇] 僕の死ないうちに僕に同情して下さい。愛するあなた、ああ、あなたが同情して下さらなければ、僕は健康が衰え、顔が青ざめて、死んでしまうでしようよ。」町が包囲されていることも、わが身の安泰も、およそ他の事柄に関する恐怖は、今や全く彼の念頭から去ってしまったのでした。彼の心の中には若気の慾情など全然起らず、考えることと言えば、こういう結論に至る自問自答のみでありました、その結論というのは、かの女性の同情をかち得たい、自分は生涯下僕(しもべ)として仕えたいということなのです。そうです、ここにこそ彼の命はあったのです、死からの救いはあったのです。

ヘクターやその他の兄弟たちは、[四七〇] 敵を烈しく攻め立てて打ち破り、勇武のほどを示しましたが、ただ勇武を示すというだけの理由では、勇武も決してトゥローイラスの心を動かさなかったのです。なるほど彼もまた、いやしくも兵士たちの馳せめぐり馬を駆る戦場で、最も勇敢な騎士の一人であり、危険の存する所に最も長く踏みとどまる勇士の一人でありまして、全く驚嘆に値いするほどの武勲を立てましたけれども、彼がそのように荒れ狂って奮戦するのは、ギリシャ軍に対していだいていた憎悪のためでもなければ、また、トゥロイの町を救うためでもなく、[四八〇] ひとえに、名を揚げて一層かの女性の気に入りたいという決意から出たことなのでした。かくて、日毎に武功を重ねて行きましたので、ギリシャ軍は彼を疫病のように恐れました。

そののちずっと彼は恋ゆえに眠りもあえず、食事をとることをもひどく嫌い、その悲しみは次第にはげしくなって行って、気をつけて眺める人の目には、朝な夕な、その悲しみが色に出てそれと知られるのでした。そこで彼は[四九〇] 熱い恋の焔に心を焦がしていることを人に気(け)取られては

と、あらぬ病に名を籍りて、熱が出て気分がよくないということにしました。彼の愛人がこのような様子に気付かなかったのか、それとも、知って知らぬ振りをしていたのか、その何れであったのかははっきり申上げることができません、しかし書物で読むところによりますと、彼のことを気にかけるとか、彼の苦悩や様々な胸の思いに気を留めるとかいうような素振りは全く見えなかったようです。ともあれ、トゥローイラスの苦悩はまことに大きくて、気も狂わんばかりです、無理もありません、あの女(五〇〇ひと)はすでに誰かほかの男性に愛を感じていて、自分などは歯牙にもかけないのではないか、そういうことが絶えず気になったのですから。このように考えると胸も張り裂けるような気持がするのですが、心の悲しみを愛人に打ち明けるだけの勇気は出ません、とても駄目です。けれども憂いの雲の晴間には、歎きながら独言を言うことが度々ありました。

「馬鹿な奴だ、前に散々恋の苦しみの憎まれ口を叩いたお前が、今度は恋の罠にひっかかってしまったじゃないか、今やお前は捕われの身になったんだ、お前の鎖をかじるがいいさ。(五一〇)お前はいつも世の恋人たちのすることを非難していたが、そのお前がいま同じことから逃れられないじゃないか。このことが世の恋人たちに知れればなんて言われると思うんだい？　お前の居ない所でせせら笑ってこんな蔭口を利くだろうよ、ご覧よ、それ、あそこを通るじゃないか、例の大賢哲居士が！　われわれ恋に悩む者たちを根かぎり軽蔑した男がさ。ねえ、全くのところ、あの男もきっとはいって来るよ、恋の神に恵まれることの薄い連中の踊りの中にさ。だけど悲しそうなトゥローイラス君、(五二〇)君はどうしても恋をしなければならない運命なんだから、よし君に同情してくれなくても、せめて君の悩みを知りつくしてくれるような女性、そんな女性にでもめぐり逢えればいいんだがね。それにしても君の愛人の君に対する愛情の冷たさはまるで冬の月夜の霜みたいだな、そして君は雪が忽ち火に融けるようにぐったり参ってしまうんだ。

悲しみが僕を導いて行く死の門口、その門口にまで辿り着いているのならいいんだが！　ああ、どんなに楽しいだろう。そうだったら、おどおどしながら煩悶しないですむだろう。(五三〇)だって、もし秘めた悲しみがぱっと広く知れ渡れば、きっと僕は嘲笑せられるんだ、馬鹿なことをする奴だと歌にまで歌われる馬鹿者の千倍も。とにかくお助け下さい、神様、助けて下さい、愛するクリセイデさん、あなたのために僕はこんなに歎き悲しむのです。つかまってしまって、そうだ、誰よりもしっかり。ああ、同情して下さい、愛するあなた、僕を死から救って下さい、僕は生涯死ぬまで、自分自身以上にあなたを愛して行く積りなんですから。優しい顔で僕を喜ばせて下さい、愛するあなた、これ以上のことを約束

して下さらなくても結構なんですから。」

注解

巻の一

(1) 他の諸作品の場合と同じく、この物語でもチョーサーは聴衆を前にして物語を語って行くという体裁をとっている。

(2) アレクトー（Alecto）、ミジーラ（Megaera）と共に、頭髪が蛇になった復讐の三姉妹神（Furies）とされている。

(3) フューリズ（Furies）が悩み苦しむという観念は、ダンテの地獄界第九歌の第三七―五一行におけるこの三女神に関する叙述の影響かも知れない。

(4) ティシフォニのこと。

(5) トゥロイ王プライアムの第二子。スパルタ王メネレーアスの后ヘレンを奪ってトゥロイ戦争の原因をつくった。

(6) トゥロイ王プライアムの長子。

(7) Dares Phrygius のこと。彼はトゥロイのヒフィースタス（Hephaestus, 火と鍛冶の神）の司祭で、「トゥロイ滅亡史」（De Excido Trojae Historia）の作者と伝えられているが、真偽のほどは明かでない。チョーサーは巻の五の第一七七一行でもダレスの名を挙げている。

(8) Dictys Cretensis のこと。彼はトゥロイ攻撃の勇者の一人たるクリート王アイドミニュース（Idomeneus）に従って戦に参加し、「トゥロイ戦争日記」（Ephemeris Belli Trojani）を書いたと伝えられている。

(9) 女神（Pallas〔＝Athena〕）の像で、この像が存するかぎりトゥロイの町は安全だと信ぜられたのであるが、後にオディシュース（Odysseus）とダイオミーディーズ（Diomedes）によって盗み取られた。

(10) ボッカッチョでは「薔薇が薫りに勝るように」となっているこの個所を、チョーサーがわざわざこのように書きかえたのは、一三八二年の一月に結婚したQueen Anne への讃辞であろうと考えられている。

(11) 参照―felix quem faciunt aliena pericula cautum.（他人の危険が彼を用心深くする者は幸いなり）。

(12) 元来はフランクの国王シャルルマーニュ（Charlemagne）が、ルノー（Renauld）に与えたいとう魔力をもつ栗毛の馬のことであるが、ひいては一般に馬の詩的表現。

(13) 原文には 'the spirit in his herte' とあり、spirit の意味に関しては、巻の三の五　注(24)参照。

(14) チョーサーのこの物語が主としてボッカッチョのフィーロストゥラートー（Filostrato）に拠っていることは明かであるにかかわらず、チョーサー自身は Lollius なる名を挙げて、この人物をトゥロイ戦争の記事の原作者と考え、この人物の語るところに忠実に従ってこの物語を書いたという立前にしているのである。この名は巻の五の第一六五三行にも見え、また、「誉の宮」（House of Fame）の第一四六八行にも見えるのみならず、巻の三の第五〇二行、第五七五行で、「私の原作者」と言っているのも Lollius を意味する積りであろう。この Lollius なる人物が果して何者であるかについては、G. Latham, Ten Brink, G. L. Kittredge などは写字生の写し間違いであろうとなし、R. A. Pratt は Horace であろうと推定しているが、詳しくはここに論じない。

(15) このトゥローイラスの歌は、ペトゥラルカ（Petrarch）のソネット第八十八のかなり忠実な翻案である。
(16) スパルタ王、メネレーアスの后で、絶世の美人。注(5)でも言及した。
(17) トゥロイ王、プライアム（Priam）と、その后、ヘキュバ（Hecuba）との間の娘で、アキリーズ（Achilles）に愛せられた。